

## 第 35 回 北海道建築賞・北海道建築奨励賞 審査経緯

北海道建築賞委員会は、2010 年 5 月 10 日?、札幌市内で平成 22 年度の第 1 回委員会を開催した。審査プロセスとスケ ジュールについて昨年に準じることを確認したうえで応募状況を検討し、支部主催の「建築作品発表会」他から委員からの応募推薦 4 作品を選び、各設計者に正式な応募手続きを依頼した。

第一回審査会は 5 月 28 日?に札幌市内で開催され、6 委員によって以下の応募 14 作品が審査対象とされた。

応募作品及び応募設計者（順不同）：

- 1 白のコレクション（山内圭吉君／(有)山内圭吉建築研究所)
- ②棲華崖（渡辺一幸君他／北電総合設計(株)他)
- ③HOUSE K（高木貴間君／(株)設計舎)
- ④黒松内ねっぷ牧舎（蔵島二三君他／(株)シエマ・アーキテクト)
- ⑤不即不離（君興治君／(株)アトリエキミ)
- ⑥三井アウトレットパーク札幌北広島  
（奥村浩和君他／三井住友建設(株)設計本部他)
- ⑦日本生命札幌ビル（鳥谷部隆司君他／(株)久米設計札幌支社他)
- ⑧GR230（前川尚治君他／(株)コウド一級建築士事務所)
- ⑨四季の家（宮崎正之君／(株)エー・ジー総合設計)
- ⑩ミニマリストの家（畑中秀幸君／スタジオ・シンフォニカ(有))
- ⑪熊谷邸（久野浩志君／久野浩志建築設計事務所)
- ⑫空方（そらざま）の家（堀尾浩君／堀尾浩建築設計事務所)
- ⑬江差旅庭 群来（中山眞琴君／(株)ナカヤマアーキテクト)
- ⑭国立大学法人北海道大学工学部建築・都市スタジオ  
（小林英嗣君他／北海道大学他)

最初に、審査の作法は多数決ではなく議論を通じて全委員の同意を得ること、評価の視点は従前同様、コンセプトと設計プログラムおよび実体的表現の「先進性」・時間空間軸における自然を含めた人間社会に対する「規範性」・それらを統合して美の創造を目指す「洗練度」の 3 項目とすることを確認し、現地審査対象作品を選定する書類審査に移った。応募資料を読み解

きながら、各委員による個別評価と活発な議論の末に、現地審査該当作品（順不同）として以下の8作品が選定された。

- 1 白のコラージュ（山内圭吉君／(有)山内圭吉建築研究所）
- ④黒松内ねっぷ牧舎（蔵島二三君他／(株)シエマ・アーキテクト）
- ⑧GR230（前川尚治君他／(株)コウド一級建築士事務所）
- ⑩ミニマリストの家（畑中秀幸君／スタジオ・シンフォニカ(有)）
- ⑪熊谷邸（久野浩志君／久野浩志建築設計事務所）
- ⑫空方（そらざま）の家（堀尾浩君／堀尾浩建築設計事務所）
- ⑬江差旅庭 群来（中山眞琴君／(株)ナカヤマアーキテクト）
- ⑭国立大学法人北海道大学工学部建築・都市スタジオ  
（小林英嗣君他／北海道大学他）

現地審査は委員七名の過半の参加を原則に3回に分けて実施された。第1回は、6月27日に札幌市内で、①白のコラージュ・⑩ミニマリストの家・⑪熊谷邸・⑫空方の家の住宅。第2回は、7月6日に札幌で、⑭国立大学法人北海道大学工学部建築・都市スタジオ。第3回は7月31日?と8月1日?、一泊二日の行程で、⑬江差旅庭 群来・④黒松内ねっぷ牧舎・⑧GR230。第1回第2回は好天に恵まれたが、第3回は前日の豪雨で順路が一部不通となり、大幅な迂回を余儀なくされた。しかし、いずれも周辺環境を含めて建築空間の内外を詳細に観察し、設計者やクライアントとの意見交換も交えて有意義な現地審査となった。

最終審査会は8月26日?、5委員出席、2委員から委任（内1委員からは意見表明）のもと札幌市内で開催され、現地審査作品を対象に最終選考が行われた。審査に先立ち次のことを確認した。計画および設計に関与した委員は、当該作品に対する見解表明を避け個別討議の際には席を外す。

選考審査は、各委員が作品に関する見解を述べたのち、作品ごとの自由討議に移り多角的視点から活発で真剣な討議が長時間続いた。やがて、個々の作品の評価と意義が整理され、本委員会の総意として北海道建築賞および同奨励賞について以下の決定をした。

北海道建築賞 該当作品なし

北海道建築奨励賞

- 「白のコラージュ」 山内圭吉君／(有)山内圭吉建築研究所
- 「熊谷邸」 久野浩志君／久野浩志建築設計事務所

今回、北海道建築賞に該当する完成度の高い作品に恵まれず残念な結果となったが、住宅作品には新しい息吹を感じさせる作品が多く、上記の二作品が北海道建築奨励賞の栄誉を得た。

一連の審査を通じて、一昨年のリーマンショックを契機とした世界同時金融不況によって、それ以前のミニバブルに踊っていた感のある建築界が大きなダメージを受けていることを実感させられた。大型プロジェクトでは、設計者が建築家としてじっくりと時間をかけ、コンテンツやアイデアを練り上げる余裕がないことを窺わせたのに対し、小住宅の分野では時間のできた建築家とクライアントが、互いに納得するまで語り合い、予算と格闘しながらも新しい住まい方に、果敢に挑戦する姿を垣間見ることができた。

現地審査8作品のうち6作品は残念な結果となったがいずれも労作佳作であり、評価の要点を以下に述べ、今後の活躍に期待したい。

●黒松内ねっぷ牧舎：研修棟・コテージ群・浴室棟・倉庫棟から構成された木造建築群だが、個々のデザインに質の差が大きく、内外とも全体としてアンバランスな空間となっている。前記した経済状況の中で、クライアントの企業代表者が交代したため、利用計画が白紙撤回という残念な状況にある。研修棟と倉庫棟は新しい表現に成功しているため、新たな利用計画が待たれる。

●GR230：この案件に関しては、書類審査の段階で公共建築の「道の駅」と考えて評価していたことが、実は間違いであったと、現地での設計者による説明で明らかになった。したがって、最終審査では論評自体を控えるという結論となった。

●ミニマリストの家：1個の大きな直方体空間に2個の小さな矩形空間を1個ずつ内外に配し、階段空間と内外を貫通するブリッジでシンプルに構成されている住空間は多様な視点を提供し、トポロジカルな空間操作は高く評価された。一方、外皮を構成する小幅板による立面構成は、恣意的で装飾的と指摘された。

●空方の家：時間とともに渋さを増す合金版に包まれた外壁に対し、内部は天窓に続く吹抜け空間の周りに多様な小空間を螺旋状に配し、ポーラスで柔らかな住空間を生み出している。その空間構成と環境設計は高く評価された。しかし、複数の内部仕上げと三次元に角度のついた形態による内部構成の複雑さは混乱した印象で秩序感を見出しにくいとの指摘がされた。

●江差旅庭 群来：美しい打ち放しコンクリートの高塀で囲まれ、僅かに玉石を乗せた黒い傾斜屋根を見せるだけの外観は、シンプルで研ぎ澄まされた景観を生んでいる反面、江差の町並みとは断絶した都市空間となり、規範性の視点から問題を指摘された。コンクリート壁で視界を

さえぎられた細い斜路の先には、エントランスからロビーラウンジ空間、さらに細い廊下の先に配された食事室と個室群。塀の内側に展開される玉石だけの庭。あらゆる場に展開される洗練された美意識と手仕事への拘りに、先進性と洗練度の高い評価がされた。

●国立大学法人北海道大学工学部建築・都市スタジオ：既存建築群との関係性、建築を学ぶ場としての意味性と重層的機能性など、建築に係わるダイアグラムが究めて精緻に構築されたことが伝わってくる。しかしただ一点、空中に浮かぶスタジオの建築的表現に関しては、異論が多く出された。コルビジェがピロティによって人に大地を解放し、屋上庭園によって太陽の恩恵を維持しようとしたことを想起したい。ガラスで囲まれたスタジオが視覚的に構造的自立性を持たず、コートをはさんで建つ強固なRC構造物に依存しなければならない在り方には、形態と構造の関係性から問題があることが指摘された。

(文責：大萱昭芳)

## 第 35 回 北海道建築奨励賞

### 山内 圭吉 君 「白のコレクション」の設計

住宅は、居住という行為を成立させることができる器である。そこには、社会の最小単位といえる家族や個人の生活を想起した空間があり、そこで彼らのプライベートに満ちた活動が開される。

この作品の敷地は、都市の中の街区公園の隣に隣接している。街区公園は、都市生活を豊かにするための環境として、緑陰や花壇、小運動や休息ができるオープンスペースが提供され、都市生活者のために、都市が提供するオアシスと言える空間である。そこは、誰もがアクセスでき、その空間を使うことが許されている公共性を有している。

このような空間にあえて隣接し、そこに住宅をつくる。プライベートとパブリック、まったく異なった機能が併置され、しかも双方に対して何らかの関係性をつくるという都市住宅にふさわしいが、それをどのように解くのが試されるプログラムを設計者は敢えて作りだした。そこには、都市に存在する建築として求められる公共的側面を取り込み、それを住宅としての空間構成や表現の領域で十分にデザインし、相容れないと考えられる2つの要素を昇華させ、住宅という建築に結実させるという設計者の強い意思を感じ取ることができる。

このような外的要因に対する明快な意思だけでなく、住宅として十分に配慮された空間構成もこの作品の特徴である。それは、階段を利用した空間移動の際に劇的に体感される感覚である。狭小の敷地ゆえに、4層に積み上がった構成を利用して、異なるレベルからプライベートの領域にパブリックの要素が侵入する。2階のホールに隣接したバルコニーは、大きく住宅の空間をめぐり取り、その壁面や天井面は、鏡面のステンレス板が貼られることで、公園の活動や風景が住宅の中に入ってくるのである。公園の緑や人々の動きが実像と虚像の中に交錯し、住宅の中に外部の風景が織り込まれる。また、3階には、住宅の中心となる居間がしつらえられているが、高さが少し下げられたダイニングの開口部からは、公園の樹木の枝のフィルター越しに、公園での人々の活動が飛び込んでくる。3階という高さがもたらす距離感を巧みに利用し、プライベート空間とパブリック空間の共存を可能にしているのである。さらに階段をつたって4階に上がると、ここにしつらえられた屋上は、意図的に構成された細長いボリュームを公園の方向に軸を取り、公園をも利用しながら、空との連続性というここに住む者だけが獲得できる魅力をもたらすことに成功している。外壁色の白も、外部や内部の風景を映し込んで周囲の風景に呼応しようとするしかけであるし、公園からの視線を十分意識した結果で

もあろう。まさに、作品名の「白のコラージュ」が具体化されているのである。

設計者は敢えてこの狭小で変形した土地を購入し、そこに都市住宅を建設した。住宅というプライベート空間であっても、私的な物語に埋没するのではなく、敷地の場所としての意味を汲み取り、都市にどのように参加するのかという姿勢は、都市の中で住宅という建築をいかにつくるのかという設計者の積み重ねてきた思考と技術の結晶である。この作品が与える清々しい清涼感は、設計者の明確な意図とそれを裏打ちした技術の結実から生まれるものであろう。「都市住宅」としてのひとつの卓越した成果として、ここに北海道建築奨励賞を贈るものである。

(文責：小篠隆生)

## 第35回 北海道建築奨励賞

### 久野 浩志 君 「熊谷邸」の設計

2階建ての家が建ち並ぶごくありふれた住宅街のなかにあつて、一見して明らかに異質な佇まいである。周囲より高くかつ低く、また周囲より細くかつ広く、それは辺りのいかなる住宅とも異なるようなあり方で風景の中に現れる。

木造3階の塔と地面に約70cm埋められたRC造部分からなる、延床面積80㎡の小住宅である。塔とRCの低層部分は、敷地の対角線上に雁行するように配置され、その前後には建物本体と同程度のボリュームの外部空間がつくられている。3層の塔以外は人の背丈ほどの高さであるために、これらの外部空間はどこも明るく開放的であり、大きな空や四方の景色をそのまま眺め渡すことができる。外部階段によって、スキップフロアのような感覚で広場のような屋上に上がると、敷地全体および周囲の家々を何か不思議な親しい距離感で感じ取ることができる。そしてこのゆったりとした空間的な拡がりをも、高さ8mの塔が引き締めている。一方、庭からも大振りな窓からその様子が窺える半地下の内部に入ってみれば、目線の先に庭の足元が拡がり、それはまさに庭に抱かれてあるかのような心地よさである。GL+70cmが、室内と庭との絶妙な関係をつくり出している。

つまりこの住宅において作者は、内部と外部、あるいは建築と外構（庭）というヒエラルキーを無にして、それらを同じ土俵において、同等にかつ立体的に解こうとしている。敷地の全体を使って、内部や外部あるいは地面や屋上も分け隔てなく、横にも縦にも同等に関係づけることで、住宅におけるそれぞれの場の関係を新たなものへとさりげなく組み替えている。日常的な風景も、目線を変えれば全く異なったものに見えるものだが、例えばここでは、庭の花々を目前に眺めながら料理をし、地表の草々と同じレベルで繋がったかのようなテーブルで食事をすることは、一般的な庭木や観葉植物を愛でることとは異なる新鮮で心地よい経験となるだろう。そしてこのような地表面とともに空間があることの楽しみは、塔上部の寝室からの俯瞰する視線があることによって、より強調されるように感じられる。

これらの構成と関係性を純粹に際立たせるために、仕上げは白塗装と白木とに限定され、またディテールには様々な工夫がなされている。例えば、内部からの視界を邪魔しないように、窓枠やハンドルは壁面に隠され、あるいはカーテンレールの存在は消されている。これらの工夫は、高度に洗練されたものというよりも、むしろごく身近なモノを細工したような微笑ましいものでもある。細部まで自らの手で徹底して工夫しようとする作者の意気込みは、肩肘張ら

ずにさりげなく全体に融け込んでいる。

この住宅から感じられるのは、建築というひとつの実体的なモノである以上に、敷地全体に及ぶ空間的な振る舞いのようなものである。建築と外部空間という古今東西様々に模索されてきた関係のあり方にも、壁に対する強い意識がある北海道においてのみならず、まだ展開の余地があることを考えさせられる小品である。

(文責：山田深)